

## 『西方指南抄』における重点について

村 井 宏 栄\*

### 一、はじめに

一三世紀に成立した親鸞遺文は、親鸞自筆の真蹟が多数伝来し、他者の書写を経っていないという意味において、日本語史研究の第一級資料に位置付けられる。親鸞遺文は、漢字片仮名交じり文（いわゆる片仮名文・漢字交じり片仮名文を含む）で記されるものを含み、それらは、多くが片仮名宣命書を含みつつ、大字片仮名を多く交用させる表記体となっている。

従来の中世漢字片仮名交じり文研究においては、漢字と仮名の比率や、仮名の大小による弁別に多く注意が払われてきた。本稿では、片仮名が同字連続する際に用いられる重複記号、重点（「ヽ」、「ゝ」いわゆる踊り字）に注目する。

平仮名文献の世界においては、一三世紀以降、文節頭における重点使用が衰退していき、そのことは異体仮名の使い分けの本格化を促進した（矢田勉二〇一二a等）。しかるに、平仮名に比して片仮名は異体仮名を多く持たず、連綿を前提としない。散らし書き等、美的要素と言える側面も見出しがたい。とするならば、中世漢字片

仮名交じり文において片仮名同字連続を表記する方法は平仮名文献とどのように異なり、重点はどのように用いられるのかという問題は重要なはずであるが、管見に及ぶ限り、多く取り上げられている<sup>①</sup>とは言い難いようである。

また、親鸞遺文の漢字片仮名交じり文研究においては、後に述べるように、独自の仮名遣いの実践、漢字音古用の墨守、使用漢字の制限等、規範的態度が多く注目されてきた。そうした傾向と重点用法との関連も未解明である。本稿はかかる視点から、平仮名文献の世界において「異体仮名の使い分けが本格的な段階に入」（矢田勉二〇一二a）つたとされる一三世紀当時の漢字片仮名交じり文献として親鸞『西方指南抄』を取り上げ、その重点の用法について報告するものである。

『西方指南抄』は、親鸞遺文資料群において、『教行信証』と並ぶ大部の言語量を誇り、しかも全巻親鸞自筆にかかる。本文は漢字片仮名交じり文で記され、内容は法然上人の法語・消息・行状等の言行録である。本稿の調査で用いたのは専修寺本である。奥書によると、本書は康元元二年（一二五六―五七）、親鸞八四―五歳時の書写にかかっているものである。

二、『西方指南抄』におけるおける重点・同字反復

本節では、『西方指南抄』における重点の使用および同字反復について概観する。以下、本稿では「コ、ロ」のような表記を「重点使用」、「ココロ」のような表記を「同字反復」とし、両者を併せて「同仮名（の）連続」と呼ぶ。

『西方指南抄』は漢字片仮名交じりで記されており、漢字と仮名の接続部分に位置する場合、重点は使用されない。同様に、漢字間の境界に位置する振り仮名部分についても通常は重点を使用せず、同字反復で表記される（以下傍線等は稿者による。「／」は改行を表し、朱点等はない限りは省略する）。

- (1) 南无阿弥陀仏ト唱<sup>ト</sup>テム上<sup>ウヘ</sup>決定<sup>クワダツマツル</sup>往生<sup>ト</sup>オモヒヲナスヘキナリ（中末一三二・六）
- (2) 観<sup>クワン</sup>經<sup>キヤウ</sup>（略）説<sup>ト</sup>ナリ（中末一三四・二）

(1)・(2) は、引用を示す助詞「ト」に、「ト」から始まる動詞が下接するが、動詞部分が漢字表記されることにより、重点が用いられない。また、(1)の漢字熟語「決定」は振り仮名中に重点を用いるという方法もあるが、用いられない。本稿では考察の対象を本文の仮名表記部分のみとし、漢字表記との接続部分、漢字表記右傍に記される振り仮名部分及び漢文部分は対象外とする。また、二字以上の重点（「／」・「、」等）についても取り上げない。

同字が連続する場合に漢字表記以外の方法を用いるとすると、その方法は二種類挙げられる。すなわち、①重点の使用（例「キ、テ」

「コ、ロ」、②同字反復（例「ヒトト」「ステテ」）である。同仮名が連続する場合、多くは音韻上同音であることが予想されるが、清音一濁音など、異なる音韻であったとしても、①②で表記されることがある（例「トケケル」〈遂げける〉「オモハ、」〈思はば〉）。その一方、同音であっても異なる仮名が用いられることがあり、③仮名遣いによる別仮名の使用（例「オモハムハワルシ」）も、まま見られる。これらのうち、本節で取り上げるのは①②である。③の、①②との関連については、第四節で考察する。

二・一 重点・同字反復の概要

本稿の調査で得られた『西方指南抄』の重点及び同字反復の用例は計九一八例である。次の（表1）に全体の概要を示す。

（表1）『西方指南抄』における重点及び同字反復

合計	文節		重点	同字反復	合計
	節頭	自立語			
合計	非文 節頭	自立語 語中尾	16（名詞15、動詞1）	78（動詞41、名詞19、副詞8、接続詞5、形容詞2、形容詞1、連語1）	94例
	付属語 その他	675（名詞264、動詞216、副詞165、代名詞14、形容詞8、連体詞8）			
799例	108（助詞96、助動詞10、接尾辞2）	8（名詞6、動詞1、副詞1）	119例	918例	141例
	33（助詞27、助動詞4、接尾辞2）	683例			

（表1）では、重点または同字反復される部分の位置によって、

自立語語頭、自立語語中尾、付属語その他の三種に分類し、それぞれ品詞ごとの種別と用例数とを示した。

(表1)より、自立語語頭では同字反復が、自立語語中尾では重点の使用が、それぞれ優位であることがうかがわれる。すなわち、文節末仮名を次の文節頭で反復する際は、(文節をまたぐことから)同字反復を用い、文節内では逆に重点を使用しやすいと指摘できる。よって、傾向としては、重点は文節境界を越えることが少ないと言える。付属語その他では重点が一〇八例(76%)と優位であるものの、同字反復の例も三三例(23.4%)見られており、三者の中では最も偏りが少ないと認められる。

なお、(表1)には出現位置が行頭のもの含まれていない。出現が行頭のを(表1)に倣ってまとめると、(表2)となる。

(表2) 行頭に位置する重点及び同字反復

文節頭	自立語語頭	重点	同字反復	
非文節頭	自立語語中尾	0	2, 12 (動詞5、名詞4、接続詞1)	12例
付属語その他	0	4 (助詞4)	1 (動詞1)	1例
合計	0例	17例	17例	17例

行頭に位置する場合、次の(3)・(4)のように、全一七例がすべて同字反復の形で出現することから、『西方指南抄』は重点を行頭に位置させない方針が存在したと考えられる。

- (3) ワレイカニシテカ往生シ侍<sup>ハル</sup>ヘキト／トヒタテマツリシカハ  
(中本八一・二)

(4) 極楽世界<sup>コクラセカイ</sup>ニマウテ<sup>ホトケ</sup>／テ仏ニマフシテマウサク(上本一六・五)  
以下、重点と同字反復の実態を、自立語語頭、自立語語中尾、付属語その他の順に観察する。

## 二・二 自立語語頭

『西方指南抄』では自立語語頭(文節頭)に重点が一六例、同字反復が七八例、計九四例が用いられている。以下に具体例を示しつつ、検討を加える。

### ◎自立語語頭―重点

- ・名詞15例 「のち」15(ソノ、チ等)
- ・動詞1例 仏タチノ、タマハムオヤ

### ◎自立語語頭―同字反復

- ・動詞41例 「て+動詞」3(エラヒテテラシタマヘルヤ等)、「と+動詞」21(タレ人ソトトヘハ等)、「に+動詞」6(御スカタニニタリケリ等)、「の+動詞」5(永観ノノタマハク等)、「は+動詞」2(イカテカハヘルヘキ等)、「もし+動詞」3(モシシカラスハ等)、「をして+動詞」1(光ラシテテラシ)
- ・名詞19例 「は+はじめ」2(アカサハシメニ等)、「は+はじめ」2(阿弥陀経ハハシメニ等)、「には+はじめ」1(コノ経ニハハシメニ)、「の+のぞみ」2(往生ノノソミ等)、「の+のち」8(末法万年ノノチ等)、ワカカタ1、普通ノノ

リクルマノ1、トイエトモ<sub>ノ</sub>ヲ1、マタタ<sub>ノ</sub>1

・副詞8例 「〜ども+もし」2（シカレトモ<sub>シ</sub>等）、「〜も+もし（は）」4（タニモ<sub>シ</sub>等）、トモカラハ<sub>ハ</sub>ナハタ1、申ヘカラスヘテ1

・接続詞5例 「〜し+しかれば」2（オホシ<sub>シ</sub>カレハ等）、「〜し+しかるに」2（シルヘ<sub>シ</sub>カルニ等）、「サス<sub>ス</sub>ナワチ1

・形容動詞2例 「〜は+形容動詞」2（トイフハ<sub>ハ</sub>ハルカニ等）

・形容詞1例 タトヒ<sub>ヒ</sub>サシト1

・連体詞1例 往生スヘケレハ<sub>コソ</sub>ソ<sub>ノ</sub>1

・連語1例 聖衆ト<sub>ト</sub>モニ1

自立語語頭の同仮名連続は、同字反復が七八例に対して重点が一六例であり、同字反復が優勢（七八／九四例、83.0%）である。

重点を用いる一六例のうち、一五例はいずれも「〜ノ、チ」の形式となっている（「一称ノ、チ」一例、「ウセテノ、チ」一例、「ソノ、チ」一例、「兆載永劫ノ、チ」一例、「万年ノ、チ」一例）。『西方指南抄』の「のち」（後）は時間性を表し、抽象的・相対的な名詞であることから、「のち」のみでは意味的に独立性が低い。「〜のち」（後）の単位で機能表現的に文中で働いている。

矢田勉（二〇二二a）は、鎌倉期の平仮名文経済文書（讓状・売券・寄進状など）において、二文節にまたがる同音節連続は基本的に同字反復によって記されるものの、「〜の、ち」のみは文節頭でも重点を使用し、「固定的な表記として後々まで残る」と指摘している。また、鄭炫赫（二〇〇六）は、慶應義塾図書館蔵『狭衣の中將』（二五九七年写）及び国字本キリシタン資料であるカサナテンセ図書館蔵『どちりなきりしたん』（一六〇〇年刊）について、文

節頭でも例外的に重点を使用した「その、ち」が共通して見られることを報告している。『西方指南抄』においては、重点を使用する「〜ノ、チ」一五例の他、同字反復の「〜ノノチ」も八例認められ（「往生ノノチ」一例、「釈迦末法万年ノノチニ」一例、「ソノノチ」一例、「末法ノノチ」一例、「末法万年ノノチ」四例）、重点の使用は徹底されていない。しかしながら、「〜ノ、チ」は、他文献に見られるような重点使用の慣例に引き寄せられた可能性がある。このような傾向が、漢字仮名交じり文献と漢字片仮名交じり文献とで共通することは注目してよいと思われる。例外的慣用の疑われる「〜ノ、チ」及び、唯一の例外と言うべき「仏タチノ、タマハムオヤ」の例を除けば、重点は文節境界を越えて用いられないと認められる。

一方、同字反復は計七八例が認められ、各品詞に広く分布している。このうち、接続詞は五例認められるが、これらは直前要素が文末であり、文頭にあたる箇所が前文末尾字との同字反復から開始されていることがわかる。

（5）<sup>ヒシツハカサシツ</sup>貧窮破戒散乱愚癡ノトモカラハナハタオホシ<sub>シ</sub>カレハカ  
ミノ諸行ヲモテ（上末二七・四）

（5）は「トモカラハナハタオホシ」で一文が終わり、接続詞「シカレハ」から新たな文が開始される。これも右に見た、「重点は文節境界を越えて用いられない」という原則に矛盾しない。

## 二・三 自立語語中尾

自立語語中尾では重点が六七五例、同字反復が八例用いられる。

具体例は以下の通りである。

◎自立語語中尾―重点

- ・名詞 264 例 御コ、ロ 37、御コ、ロエ 1、御コ、ロカハリ 1、御コ、ロサシ 2、御ス、メ 1、カサリコ、ロ 1、コ、チ 2、コ、ロ 180、コ、ロサシ 12、コ、ロネ 1、コ、ロハエ 1、サ、ヤキ事 1、ス、メ 5、タ、事 1、タ、ミ 3、タナコ、ロ 1、チ、1、ツ、キ 1、ハ、1、ハ、カリ 2、フタコ、ロ 2、ユメウツ、1、マ、
- 6
- ・動詞 216 例 アラワル、キ、キ、テ、コ、ロウヘシ、コ、ロエ候ニ、ス、メテ、タ、ム、ツ、キ、ト、マリテ、ハナル、ハ、カル、フル、等
- ・副詞 165 例 イカ、24、イサ、カ 8、タ、111、タ、イマ 1、タ、シ 15、タ、チ 23、フタ、ヒ 1、ヤ、1、ヤ、モスレハ 1
- ・代名詞 14 例 コ、14
- ・形容詞 8 例 コ、ロクルシク 2、ナカ、ラム 1、ユ、シキ 5
- ・連体詞 8 例 カ、ル 8

◎自立語語中尾―同字反復

- ・名詞 6 例 オトトヒ 1、ココチ 1、ママ 2、ミミ 2
- ・動詞 1 例 トトメ 1
- ・副詞 1 例 ホホ (ほほ) 1

同仮名連続は、自立語語中尾では、ほぼ重点に統一されていると言ってよい (六七五／六八三例、98.8%)。例外的に同字反復が計八例見られるが、このうち名詞「ママ」の「マ」は、第二画が重点

「マ」の形状にかなり近似する。ここで重点を使用してしまうと「マ、」となり、「マ、」等に読み誤る可能性が生じる。次の図版 (A) では、「ママ」に続くのが「ニ」であることもあり、誤読を回避するためにあえて同字反復を用いたものかと考えられる。ただし、「ママ」は重点使用の「マ、」が他に六例認められ、同字反復の「ママ」は臨時的な使用と判断される。

図版 (B) の「ミミ」においては、通常用いられる「ミ」の字形 (図版 C) よりも三画目がかなり横に長く、漢数字「三」に近い字形で記しており、誤読を避けるために意識的に点画を変形させていると判断できる。この例は「ニ」が下接することもあり、重点を用いないものと考えられる。

名詞には他に「オトトヒ」「ココチ」があり、さらに他、動詞「トトメ」(留)、副詞「ホホ」(ほほ)が見られるが、これらについて同字反復を用いる要因は不明である。なお、「ココチ」については、重点を使用する「コ、チ」の例も二例見られている。

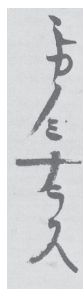
(図版 A)



(図版 B)



(図版 C)



(下本一二一・三)

(下本一五二・二)

(下末一二三・二)

## 二・四 付属語その他

付属語その他では、重点が一〇八例、同字反復が三三例見られる。

概して重点使用が優位であるものの、分布には最もばらつきが認められる。以下検討していく。

## ◎付属語その他―重点

・助詞 96 例  
「て」 44 (アテ、イテ、ウチステ、エラヒステ、

ステ、等）、「と」2（御ソラコト、1、ヒカコト、1）、「に」

8 (クニ、5、ナニ、3)、「の」 13 (タキモノ、3、モノ、10)、

「は」1(コトハ、1)、「ば」25(イハ、ウタカハ、オモハ、

候ハ、タテタマハ、等）、「ばや」 1（トケサセマイラセ候ハ、

ヤ1)「も」1 (コロモ、1)、「づつ」1 (スコシツ、1)

・助動詞10例 「ず」 2 (オハシマサ、レハ1、コロサ、ル1)、

「る」 4 (オモヒシラル、1、オクラル、1、タモタル、1、

マフサル、カユヘニ1)、「らる」4 (カ、セラル、1、セラル、

2、マイラセラル、1)

・接尾辞2例  
「ども」2（コト、モ2）

## ◎付属語その他―同字反復

・助詞27例 「て」 4 (ステテ<sub>3</sub>、ヘタテテ<sub>1</sub>)、 「と」 3 (コト

ト3、「に」16（オホタニニ1、クニニ15）、「は」2（コトハ

ハ<sub>1</sub>、ミコトハ<sub>1</sub>ハ<sub>1</sub>、「ば」<sub>1</sub>（イハ<sub>1</sub>ハ<sub>1</sub>）、「も」<sub>1</sub>（御弟子

トモモ(1)

・助動詞 4 例 「けり」 1 (トケケル 1)、「ず」 3 (イタササラ

ム 1、申ササ<sub>1</sub>ラムコトノ 1、申ササ<sub>1</sub>ラムヲコソ 1)

・接尾辞2例  
「ども」2 (コトトモ2)

五四

二・四・一 助詞

右の語例を観察すると、語によって、重点と同字反復の両者に分布するものと、一方に偏るものとが存することがわかる。助詞について整理すると、(表3) のようになる。

(表3) 助詞における重点及び同字反復の形態分類

同字反復	重点		語頭	語中尾
四	四四	て		
三	二	と		
一六	八	に		
〇	一三	の		
二	一	は		
一	二五	ば		
〇	一	ばや		
一	一	も		
〇	一	づつ		
二七	九六	計		

(表3)によると、助詞「て」「の」「ば」は重点使用が優位であるものの、逆に「に」は同字反復が優位であり、「と」においては用例数が拮抗すると言ってよい。助詞の種別によって分布傾向の差が認められるのであり、前の具体例と併せ、前接する成分の品詞性によって特に偏りが見られるわけではないということがわかる。

右に見た助詞のうち、「づつ」以外は一音節一字から構成され、

助詞語頭において前接成分と同仮名が連続する。重点に「前接要素との連続性」という性質を認めるならば、重点使用の有無によって、切れ続きが明示されうると言える。すなわち、同仮名が連続する場合、前接要素との熟合度が高ければ重点を表示することでその熟合度をマークし、高くない場合には、同字反復によって境界標示が可能である。したがって、特に助詞語頭において重点が優勢である(九五／一二三例、77.9%)というのは、『西方指南抄』では、語ではなく、文節単位での境界標示を志向していることにはかならない。問題は、なぜ助詞の種類によっては、同字反復が優勢であったり、



重点と拮抗するの点という点にある。以下、助詞「と」と「に」について検討を加える。

まず、「と」を検討する。重点使用の二例を示す。

- (6) ヨシアシヲサタメ申候ヘキコトニ候ハスヒカコト、申候ハ、(下本七〇・二)
- (7) コレヲウタカハ、仏ノ御ソラコト、申ニモナリヌヘク(下本一〇四・四)

(6)・(7) は、それぞれ「僻事と申したならば」、「仏の御そら言というようなことにもなり」という文脈で用いられる。重点の承けるものは「ヒカコト」「仏ノ御ソラコト」であり、それぞれ名詞を承け、比較的構造が単純でわかりやすい。

一方の同字反復三例を左に示す。

- (8) シカレハ念仏衆生ニツイテ光照ノ遠近アリト釈シタマヘルマコトニイワレタルコトコソオホエ候ヘ(上本九五・五)
- (9) ソレニモトノコトクニミタテマツリテアラタマルコトナカラムコトハマコトニアハレニアリカタキコトコソオホエ候ヘ(上本一三〇・三)
- (10) 久遠実成ノ宗アラワセルヲモテ殊勝甚深ノコトトセリ(上本一一六・四)

(8)・(10) はすべて形式名詞「コト」を承ける。(8)・(9) は共に「コトコトコソオホエ候ヘ」の形をとり、「これこれこういうことだと感じる」という思考内容の引用を示している。用言内容

を「コト」でまとめた上で承けている。(10) はありさまや様子を表して、そのように定位したことを示す。(8)・(9) は、「コソ」を介入させるなど、主節述語が強調される点が印象的である。いずれも、単純に名詞の内容を承ける(6)・(7) よりも意味内容が抽象的であり、述語構造に関わっていると言える。なお、助詞「と」は、付属語として同字反復される(8)・(10)の他、次の(11)のように、自立語語頭に「と」と動詞の形で出現し、経典からの引用を示す例が見られる(二・二節)。

- (11) コノ経ノ同本異訳大阿弥陀經ニハコノ願ヲ選択ノ願トトカレタリ(上末七・二)

本稿の調査では、かかる例に「タレ人ソトトヘハ」(中本九二・五)等の発話引用類を併せ、計二二例が見出された。これら「と+動詞」の例や、(8)・(10)の「コト」の例は、文節境界を越えるか否かという要因もさることながら、重点使用の例とは異なり、引用内容と主節とが意味のまとまりとして別次元ととらえられるため、いずれも重点を使用しないものと考えられる。

次に、助詞「に」について検討する。「に」は八例が重点を使用し、一六例が同字反復の形をとる。重点使用の八例中五例が「クニ」、「同字反復の一六例中一五例が「クニ」であり、上接語に偏りが見られる。

- (12) 三ニハ弥陀ミツカラノタマハクコレハコレ跋陀和菩薩極樂世界ニマウテ、イツレノ行ヲ修シテカコノクニ、往生シ候ヘキト阿弥陀仏トヒタテマツリシカハ仏コタエテノタマハ

クワカクニ<sup>ニシヤウ</sup>生セムトオモハ、(上本六九・三)

(12) では同仮名の連続として助詞「に」が二例観察される。両者は同一丁において、ともに「クニ」に下接しながらも、一方は重点を使用し、一方は同字反復を用いている。加えて、同字反復一六例のうち、(12) の後者及び次の(13) は、助詞「ニ」の部分が小字仮名となっている。これらは同字が反復するものの、表記種としては別種類のものを用いており、大字仮名に小字仮名を下接させることで、「クニ」と「ニ」の境界を視覚的に伝えている。

(13) カノクニ<sup>ニ</sup>往生<sup>ワウシヤウ</sup>シテノウエノコトニ<sup>ニ</sup>候<sup>サウラウ</sup>(上本二・三)

漢字片仮名交じり文においては、通常、小字仮名は漢字に下接することが多い。大字仮名に小字仮名が下接することもあるが、観智院本『三宝絵詞』や延慶本『平家物語』では、その際の小字仮名は「ニ」に集中する(村井宏栄二〇〇六)。言語単位(ほとんどは文節単位)の末尾に位置する「ニ」は、境界標示のマークとして意識されやすい環境下にあった可能性が認められ、助詞においては、唯一「に」において同字反復が優勢である理由と考えられる。

## 二・四・二 助動詞

助動詞は重点が一〇例、同字反復が四例見られ、助詞と同様、重点が優勢であるように見られる。しかしながら、助動詞の種類によって、語頭・語中尾の所在の別は異なる。助動詞の種類によって分類すると(表4) のようになる。

(表4) によると、助動詞「る」「らる」にはすべて重点が用いら

れる。具体的な語例は「る、」四例と「らる、」四例であり、これらにおいて同字反復は見られない。

(表4)

助動詞における重点及び同字反復の分類

	語頭		語中尾	
重点	〇	けりず	〇	る
同字反復	一	三	〇	四
			〇	四
			四	一〇
				計

同字反復が用いられるのは「けり」「ず」である。同字反復四例のうち、助動詞「ず」に属するのは次の(14) ～(16) の三例である。参考までに、重点使用の二例(17・18) も挙げる。

(14) 弥陀ノ・チカヒニ・信ヲ・イタサ・サラム人ハ(下末六〇・五)

(15) 御返事ヲ・申サ・サラムコトノ・クチオシク候ヘハ(下本三七・四)

(16) イカナル時ニモ・申サ・サラムヲコソ(下末一九五・五)

(17) モノ、命ヲ・コロサ、ルヲ・業因ト・スルナリ(上本一一七・五)

(18) 法蔵菩薩・オハシマサ、レハ・法蔵菩薩・約シテ・本願ノ・体用ヲ・論ヘキニ・アラス(中末一一四・三)

(14) ～(16) においては、いずれも動詞と「ざらむ」の間に重点が施されており、かかる例において同字反復と重点とが連動している点は興味深い。動詞と「サラム」の間においては、境界を意識しやすかったようである。ただし、助動詞全般において、本稿の調査では得られた用例数が少なく、推測の域に留まらざるをえない。



以上、『西方指南抄』における重点と同字反復とを検討した。概して、文節頭では重点を用いず、逆に非文節頭では重点を用いる傾向が見出された。書記法の一貫性はかなり高いと評価できよう。重点は基本的には文節境界をまたがず、前接要素との連続性を標示することで文節を単位とする標示に寄与し、可読性の向上につながっていると考えられる。

### 三、仮名遣いとの関連

#### 三・一 中世漢字片仮名交じり文献の仮名遣い

片仮名文献におけるいわゆる仮名遣い、仮名字体の用いられよう(以下「仮名遣い」)が、平仮名文献のそれとは異なった様相を呈することは、既に多くの先行研究が指摘している。

一般に、片仮名は平仮名に比べて表音的と言われることがあるが(小林芳規一九七一)、中世漢字片仮名交じり文献にあつては、必ずしも表音的とは言えない側面を持つことが近年の研究において論じられている。遠藤邦基(二〇一四)は、平仮名本である資経本十五家集が、鎌倉時代後期の浄土宗西山派の僧侶承空(？)元応元(一二二九)年、一説に(元亨三(一二三三)年)によって片仮名本に転化書写された際、資経本の表記を定家仮名遣いによって変更する場合があると指摘している。

一方で、片仮名文献は資料ごとに用いる仮名・仮名字体が概ね定まっているものも見られる。大福光寺本『方丈記』(鎌倉初期書写)

は、「オーヲ」の対立において、ほぼ「ヲ」に統一されており、語頭・語中尾を通して「オ」はごくわずかにしか用いられていない(犬飼隆一九八九・中野真弓一九九一)。また、藤原教長『古今集註』(仁治二(一二四一)年書写)においても、同対立については同様にほぼ「ヲ」に統一されており、「オ」はわずか三例しか見られないことが樋野幸男(一九九〇等)によって指摘されている。両書における「オ」は、「ヲ」に対する仮名遣い上の対立というよりも、「ヲ」に対する補助字体・有標の仮名字体であると位置付けられている(犬飼隆一九八九・樋野幸男一九九六)。

かかる状況下、親鸞遺文においては独自の仮名遣いが実践されていたことが知られる。親鸞の仮名遣いについては吉沢義則(一九二二)以来の研究史の蓄積があり、金子彰(一九七九)・佐々木勇(二〇一一 a・b)によって、概ね次のような傾向としてまとめられている。

- ①助詞「を」は「ヲ」で表記される一方、「をば」「をも」「をや」「をか」は「オハ」「オモ」「オヤ」「オカ」で表記される。
- ②自立語の語頭には「オ」を用いる。
- ③仮名遣いには一定性が認められ、同一語は一定の仮名遣いで表記する。

助詞「を」が「ヲ」で表記されることと対照的に、「をば」「をも」「をか」「をや」が「オハ」「オモ」「オヤ」「オカ」で表記されることは、自立語語頭に「オ」を用いるという規則性を敷衍したものと考えられ(金子彰一九七九等)、「オハ」等の仮名遣いの目的は、「語句の纏まりを明示することであつた」(佐々木勇二〇一一 b)とさ

れている。<sup>(8)</sup>自立語語頭や「をば」を「オハ」で表記する等という仮名遣いは、本稿で見た、非語頭であることを標示する重点と同様、文内における分節の働きに参与するものと考えられる。

### 三・二 『西方指南抄』におけるオーヲ対立

前節で述べたとおり、同音が連続する際、漢字表記以外の方法を用いるとすると、その方法には①重点の使用、②同字反復の他、③仮名遣いによる異仮名の表記が考えられる。『西方指南抄』における③について、圧倒的多数を占めるのは、「ゝを+動詞」及び「オホゝ」に始まる各語である。それぞれの語例を示す。

#### 【ゝを+動詞】

ゝヲオカム(拝) ゝヲオク(置) ゝヲオクル(送) ゝヲオコス(発・起) ゝヲオコナフ(行) ゝヲオサム(収・修) ゝヲオシフ(教) ゝヲオシム(惜) ゝヲオソル(恐・懼) ゝヲオトロカス(驚) ゝヲオホシメス(思召) ゝヲオモフ(思・想) ゝヲオロス(下・降)

#### 【おほゝ】

オホイカタ(大筏) オホカタ(大方) オホキナリ(大) オホケナシ オホコ(大胡) オホシ・オホク(多) オホス・オホセ(仰) オホタニ(大谷) オホチ(大路) オホフ(覆) オホマワリ(大回) オホヤウ(大様) オホヤケ(公) オホヨソ(大凡)

#### 【その他】

ミカホヲ(御顔を) 功能ヲオモク(ゝを重く)

ゝハワスレタマヒケレトモ(ゝは忘れ給ひけれども) ゝハワルシ(ゝは悪し) ゝハワレラカ(ゝは我らが) ゝハワカ(ゝは我が)

右分類のうち、【おほゝ】及び【その他】はいわゆる歴史的仮名遣いに合致するが、【ゝを+動詞】については歴史的仮名遣いに合致するものではないものの両者が存在する。

前述の通り、親鸞遺文において格助詞「を」は必ず「ヲ」で表記され、自立語語頭は「オ」で表記される傾向が顕著である。よって、「ゝを+動詞」は、「ゝヲオ…」となり、重点や同字反復の表記とはならない。

(19) コノ御仏ヲオカミマイラセタマフヘシト申侍ケレハ(中本五九・四)

(20) 六字ヲトナフル(朱筆「ニ」)一切ヲオサメテ候也(中末九七・四)

(21) 先往生要集ヲモテコレヲオシフヘシ(中本四八・五)

(22) 生オモ死オモワカレヲツクルトキニハナコリヲオシムコ、ロタチマチニモヨオシ(上本一二七・五)

右用例は「ゝを+動詞」の形式を取るが、用いられる動詞はそれぞれ、(19)「オカミ」(拝)、(20)「オサメ」(収)、(21)「オシフ」(教)、(22)「オシム」(惜)である。動詞語頭が「オ」に統一されているが、これらは歴史的仮名遣いではそれぞれ「ヲカミ」「ヲサメ」「ヲシフ」「ヲシム」となるはずである。「ゝを+動詞」の動詞部分を歴史的仮名遣いから見た場合、異なり一三語のうち歴史的仮名遣いに合致するのは九語であり、四語は合致しない。また、同動詞を定家仮名遣

い(『仮名文字遣』および『色葉字類抄』によって検討)から見た場合にも、異なり一三語のうち一致するのは九語であり、両仮名遣いとも、一致率が相当に高いとは言いがたい。

鄭炫赫(二〇〇六)によると、キリシタン版国字本宗教書七文獻では、文節頭での重点使用は、合計で計二三例見られ、うち一二例は「を、」であるという。文節頭で重点が使用される場合、「を」に重点が下接する例が半数を占め、他を圧倒する。これは、助詞「を」が頻用されること、かつ、そもそも「を」(お)から始まる自立語が多いこと、の二点に起因しており、「を」(お)は、他に比べて広く同音が連続しやすい環境下にあったことを示している。

助詞「を」は、ジャンルや表記体をこえて「を」(ヲ)で表記され、仮名遣いとしてゆれることは少ない。「ㇿヲ」に下接する語が同音の連続となる場合、漢字表記を用いないならば、①「ヲ」で同字反復する方法、②重点を使用する方法、③「オ」を用いる方法の三通りが考えられる。このうち『西方指南抄』が採用したのは③であった。同文献内において、「オ」は言語分節上(語頭)、対して「ヲ」は(非語頭)のマークとして機能していたと指摘できる。

『西方指南抄』は、全篇に亘って漢字表記には徹底的に振り仮名を施し、また、分かち書きもままなされている。さらに、おおよそ全編に亘って朱点が記入されており、これはほぼ文節(あるいは句)に相当する単位であって、句読点的な役割を担っている。『西方指南抄』は、言わば、文における文法的単位の表示に極力注意を払った資料であると言える。本文の精確な伝達を目指し、誤読防止に最大限意を砕いたものと評価できる。重点が文節をまたがない傾向を有し、非語頭であることを標示するのと同様、「オーヲ」の対立において、文節末に位置する助詞「を」を「ヲ」とし、語頭を「オ」

に統一したのは、振り仮名・分かち書き・朱点・重点と共に、言語分節の文字上の標示と位置付けられる。ここにおいて、重点という重複補助記号の用法と、使用仮名の種別という仮名遣いの問題とが統一的に説明されることとなる。

#### 四、おわりに

本稿の結論を以下にまとめる。

【ア】『西方指南抄』の重点及び同字反復について観察すると、文節頭では重点を用いず、逆に非文節頭では重点を用いる傾向が認められる。この書記法の一貫性はかなり高いと評価できる。重点は基本的に文節境界をまたがず、前接要素との連続性を標示することで文節を単位とする標示に寄与し、可読性の向上につながっている。

【イ】例外的に文節頭に重点が用いられる一六例のうち、一五例は「ㇿノ、チ」が占めている。この例外例は他資料においても慣用的傾向を持つており、共通性が認められる。

【ウ】親鸞遺文においては、自立語語頭には「オ」を用い、助詞「を」は「ヲ」で表記される一方、「をば」「をも」「をや」「をか」は「オハ」「オモ」「オヤ」「オカ」で表記されることが夙に知られる。この結果、本書の「ㇿを+動詞」は「ㇿヲ+オ…」となり、同字連続とはならない。「オ」は(語頭)、対して「ヲ」は(非語頭)

のマークとして機能していたと指摘することができ、重点の用法と共に、言語分節の文字上の標示と位置付けられる。

親鸞遺文においては、前節に見たような独自の仮名遣いの実践の他、漢字音古用の墨守、使用漢字の制限等の規範的態度が先行研究において多く指摘されている（金子彰一九八〇・佐々木勇二〇一〇等）。本稿に見た重点用法の一貫性は、かかる親鸞遺文の表記傾向と矛盾しない。

中世漢字仮名交じり文における重点の使用について、矢田勉（二〇一二a）は鎌倉期の平仮名経済文書（讓状、売券、寄進状など）を取り上げ、これらにおいては平安朝仮名文とは異なり、例外を除いて文節頭に重点は出現しないと述べている。同様に、平仮名資料の親鸞遺文においても文節頭は重点を用いず、同字反復を用いているとしている（用例は矢田勉二〇一二aによる）。

- (23) 安養浄土に往生すれはかならずすなはち无明仏果にいたると釈迦如来ときたまへり（「かさまの念仏者」）
- (24) いままたこれを案するになを専修をすくれたりとす（ひらがな本唯信抄）

これらは『西方指南抄』の傾向に等しく、同じ親鸞遺文において平仮名文献と片仮名文献の両者において、重点の用法が共通する可能性が見出される。

一方で、中世仏教者の著述した漢字片仮名交じり文文献であつても、重点が文節頭に出現する例はまま見られる。次の(25)（(27)は『却癡忘記』、(28)・(29)は『光言句義釈聴集記』の例で

あり、両書は共に高山寺明恵の聞書類である。『却癡忘記』（高山寺本は文暦二年（一二三五）以降成立）は明恵上人の教訓・談話等を、その晩年に近侍した弟子の長円が筆録した書であり、『光言句義釈聴集記』（高山寺本は正元元年（一二五九）書写）は、明恵上人が自撰の「光明真言句義釈」を講じた際の聞き書きを弟子が整理したものである。

- (25) イマスシキシツホウノ事ノ、コリタルニテハアルニ（上八〇三）

※「イマスシキ」は「イマスコシキ」の誤りか。

- (26) アノムカヒノ山ノフモトニタナヒキタル雲モソコアケテコラムセヨ、ニオモシロキモノカナ（上一七〇四）

- (27) 自然ニ人モ参シテ其寺ハコ、チカ、ヘリテナトイヒテハモタイナキ事也（上一八〇一〇）

- (28) 而ヲ近代——ハ、タ、モノヲ、モシロクシナスヲ以テ（上一二五）

- (29) サルホトニアチ、カヒコチ、カウ也云々（上五五〇）

右の(25)（(29)からわかるように、明恵関連資料では重点が文節頭に現れる例は散見され、同時期の仏教者による漢字片仮名交じり文の著述であったとしても、重点用法には個人差が認められるものと考えられる。

もとより本稿は、親鸞遺文の一資料として『西方指南抄』を取り上げ、その重点の用法について論じたものである。『唯信抄』、『唯信鈔文意』、『一念多念文意』等、他の漢字片仮名交じり文からなる親鸞遺文との比較検証、ひいては、一三世紀における漢字片仮名交

じり文における重点用法の一般的状況の解明は、すべて今後の課題である。

## 注

- (1) このような状況下、中川美和(二〇一二)は平仮名本(資経本)を親本とする片仮名本の承空書写本『実方朝臣集』・『行尊大僧正集』を調査し、重点の使用についても比較している。承空による私家集の書写年代について、田中登(二〇〇六)は、永仁三年(一二九五)から正和二年(一二三三)の間としており、『実方朝臣集』・『行尊大僧正集』はともに永仁二年(一二九四)の資経書写本を片仮名本に転化書写している。なお、『行尊大僧正集』については、田中登(二〇〇七)が永仁五年(一二九七)に書写したとしている。結果、重点の使用については、「ほぼ資経本を引き継いでいる」(中川美和二〇一二)としている。
- (2) 池田亀鑑(一九四一)は、『土左日記』の紀貫之自筆本では重点は行頭で使用されることがあったが、為家本では重点を同位置では用いない方針が存したことを指摘している。また、(表2)では自立語語中尾に位置するものが同字反復一例のみしか見られていない。このことから、同仮名の連続する自立語を書写する際には、当該箇所で改行することにならないよう、書写時に注意を払っていた可能性も指摘できる。
- (3) 例外的に同字反復がなされる名詞のうち、「オトトヒ」(ヲトトヒ)は「をとつひ」の変化形で「をと」(遠)―「つ」(助詞)―「ひ」(日)の語構成から成る。『西方指南抄』が書写された一二世紀、「をとつひ」・「をとつひ」は両語形がともに存在したことが予想され、別語形が念頭にあったがゆえの同字反復かと思われるが、想像の域を出ない。
- (4) 「づつ」は重点の一例(「スコシツ、」のみが見られ、これは「づつ」の二文字目が重点によって繰り返されておられ、語中尾の例である。その意味では他例と分けて考える必要がある。
- (5) 『西方指南抄』においては、ままたち書きがなされ、さらに、ほぼ文節単位によって朱点の記入が行われていることもその証左となる。宮田裕行(一九八一)参照。
- (6) 中世漢文文書の助詞表記における助詞「に」について述べた矢田勉(二〇一二b)は、「中世の漢文文書の助詞表記で特徴的なのは、万葉仮名「仁」字の宣命書による助詞「に」表記である。中世文書は、近世文書に比べて助詞を明示ことが少ないけれども、その中にあっては「仁」字の用例が特に目立つのである」としている。なお、二三節の「マ」の例で見たように、「二」の字形形状のために同字反復が優勢であるとする考えもありうるが、重点「、」が「点」として記されるのとは異なり、「二」の二画目は明確に横画として書かれる場合が多く、この要因には当てはまらなうと思われる。
- (7) 宮田裕行(一九八一)参照。
- (8) 親鸞遺文において、「ニモ」「ニシテ」「ニハ」のように、複合辞の一部であったとしても、「二」のみ小字化する現象が観察されるのは対照的に、助詞「を」を含む複合辞「オハ」「オモ」等は、ほぼ必ず大字仮名で表記されることも証左として挙げられる(佐々木勇二〇一一b参照)。
- (9) 同一用言を用いる用例については終止形で示した。たとえば、「ヲオコス」は、具体的には「ヲヲオコスナリ」「ヲヲオコシタマヒケムモ」「ヲヲオコシテ」「ヲヲオコシタリキ」等多様な表現形式を含む。また、それぞれ複合動詞を含む。なお、「おほ」の語例に例外の見られないことから、ハ行転呼が完了していない、あるいは「オ」と「ヲ」に音韻上の対立が存して「オ」と「ホ」が別音韻であったという解釈の成り立つ可能性があるが(常磐井猷磨



一九六二)、今は措く。

(10) 親鸞の仮名遣いについて、先行研究の概略を述べた佐々木勇(二〇一一a)は、「親鸞聖人の仮名遣いには、歴史的仮名遣いに一致しないものが存する。また、定家仮名遣いとも一致しないものが多い。この仮名遣いを、親鸞聖人がどこかで学んだものか、独自に考えたものか、不明である」としている。

(11) 宮田裕行(一九八二)は、親鸞遺文について、分ち書きがなされていらない箇所にも朱点が存することから、朱点記入は本文書写・分ち書きとは同時には行われておらず、本文書写の後に行われたと推定している。

## 引用・参考文献

池田亀鑑(一九四二)『古典の批判的処置に関する研究』第一部、岩波書店

犬飼隆(一九八九)「片仮名の成立—今後に残された問題—」『日本語学』八一、明治書院

遠藤邦基(二〇一四)「片仮名書き和歌の仮名づかい—平仮名本からの書写の場合—」『国語文字史の研究』一四、和泉書院

金子彰(一九七八)「親鸞の仮名づかい」『国文学攷』七六

金子彰(一九八〇)「親鸞聖人遺文の表記研究(1)—自筆書簡に於ける語の漢字表記を主として—」『新潟大学教育学部長岡分校研究紀要』二五

小林芳規(一九七二)「中世片仮名文の国語史的研究」『広島大学文学部紀要』三〇(特輯号三)

佐々木勇(二〇一〇)「親鸞と明恵の漢字音—漢字片仮名交じり文における比較—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』五九

佐々木勇(二〇一一a)「親鸞聖人の仮名遣いについて」『浄土真宗総合研究』六

佐々木勇(二〇一一b)「親鸞遺文における「オハ」等の仮名遣い開始時期と異例について—漢文の訓点における実態調査とその位置づけ—」『国文学攷』二〇九

田中登(二〇〇六)『承空本私家集 中』解題、朝日新聞社

田中登(二〇〇七)『承空本私家集 下』解題、朝日新聞社

鄭炫赫(二〇〇六)「キリシタン版国字本宗教書の重点について」『論集』(アクトセント史資料研究会) 二

常盤井猷磨(一九六二)「親鸞聖人仮名遣概略」『高田学報』五〇

中川美和(二〇一二)「冷泉家藏承空書写『実方朝臣集』『行尊大僧正集』の表記について」『国文学論考』四八

中野真弓(一九九二)「中世片仮名文における「オ」「ヲ」の仮名遣について—『法華百座聞書抄』『方丈記』『三帖和讃』—」『国文学報』三四

樋野幸男(一九九〇)「片仮名文における〈有標の字母〉の提唱—および有標的効果の基盤—」『名古屋大学国語国文学』六七

樋野幸男(一九九六)「日本語における〈有標の文字〉」『富山大学国語教育』二一

宮田裕行(一九八二)「親鸞上人の言語意識—分ち書き・句読点から複合語に及ぶ—」『国語語彙史の研究』二、和泉書院

村井宏栄(二〇〇六)「観智院本『三宝絵詞』における小字仮名—漢字片仮名交じり文における三種類の表記種—」『三重大学日本語学文学』一七

矢田勉(二〇一二a)『国語文字・表記史の研究』第三編第七章、汲古書院、初出は同(一九九五)「異体がな使い分けの発生」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院



矢田勉(二〇一二b)『国語文字・表記史の研究』第四編第二章、汲古書院、初出は同(二〇〇〇)「漢文文書に於ける助詞の仮名表記の変遷―「仁」の消滅と「江」の出現を中心として―」『鎌倉時代語研究』二三、武蔵野書院

吉沢義則(一九二二)「親鸞聖人の写語法」『龍谷大学論叢』、後に同(一九二七)『国語国文の研究』岩波書店所収

#### 使用テキスト

◆『西方指南抄』：『増補親鸞聖人真蹟集成』第五卷(宝蔵館、二〇〇五)

◆『却癡忘記』・『光言句義釈聴集記』：『明恵上人資料』第二(東京大学出版会、一九七八)

#### 付記

本稿は、第一三九回名古屋言語研究会例会における口頭発表に加筆・修正を施したものである。発表に際し、多くの貴重なご意見、ご教示を賜った。記して深謝申し上げる。また、本研究は平成二五―二九年度科学研究費補助金(若手研究B)「中世漢字片仮名交じり文における小字仮名を中心とした書記史的研究(課題番号：二五七七〇一七四)」(研究代表者)による研究成果の一部である。

\* 国際コミュニケーション学部 表現文化学科